



①



②

③

④

①ポットに植えられたユーカリの苗 ②苗を作るための親木 ③苗が小さいうちは温室で管理 ④生育具合を確認する菅谷栄一さん



(上)ロゴも作成。現在は直売所の販売のみ
(左)BKシードレス

人気を誇るシャインマスカットは、皮ごと食べられてパリッとした食感が特徴。上品な甘みと爽やかな香りが魅力です。また、クイーンニーナは大粒で高級感があり、甘くてジューシー。人気上昇している注目の品種です。他にも、あづましずく、ナガノパープル、コトピー、マスカサートイーン、BKシードレス、サニードルチェ、マスカットノワーなどがあります。実は、品種を入れ替えたり、試しに栽培してみたりするのも、根域制限栽培ならやりやすいとのこと。鉢を替えればよく、翌年には収穫できるからです。

本場のぶどう産地の露地物より一足早く収穫できるのが強みで、早いものは7月中旬から販売が開始でき、シャインマスカットもお盆の時

期に間に合います。菅谷さんはハウスの前にテントを立てて直売しており、昨年は約2100房を売り上げました。いろいろな品種の特徴を聞いて、食べ比べてみるのも楽しそうです。「今は直売のみなので、お客さまの声を直接聞くことができます。良いものを作れば評価していただける。それが一番のやりがいです」

ユーカリのオリジナル品種 シルバーウェーブを送り出す

次に、多くの会員が手がけるユーカリについて皆さんから話を聞きました。耕作放棄地を利用して広げたユーカリ栽培は、わずか数年で全国屈指の生産量を誇るまでに急成長しています。その陰には、常識にとらわれない3つの英断がありました。1つ目は、メリクロン苗の導入です。これは親木の根や茎の先端部にある、細胞分裂の盛んな成長点を培養して増殖した苗のこと。葉の形にばらつきがなく、美しく丈夫なユーカリが育ちます。しかし非常に高価な苗のため、既存の産地では導

入されていませんでした。会では、銀色の葉が風に吹かれて波のようにそよぐ姿と、波崎の「波」からシルバーウェーブと名付け、京浜市場へ出荷しています。

2つ目は、通年出荷です。他の産地では、3月に根本から数十センチの高さで幹を切る台切り剪定をして、秋まで出荷が止まるのが常識でした。そこで台切り剪定をせずに枝を切りながら出荷する方法を試み、通年出荷を実現。春の歓送迎会シーズンや5月の母の日に向けて、驚くほど注文が入ったといいます。

3つ目は、小ロットでの出荷です。これまで1箱に1メートル・100本入りのユーカリが慣例でしたが、50センチ・60本入りの小ロットとし、花屋さんが仕入れやすくなりました。

菅谷栄一さんは「新規参入だから思い切ったことができたのだと思います。加えて、花き市場と長年の付き



波のようにそよぐシルバーウェーブ

合いがあったことも強みとなりました」と語ります。会員は、実生苗を使ったグニー、銀丸葉、パルブラなどの品種も栽培。それぞれ葉の形や色、香りが異なり、ユーカリの楽しみ方を広げています。

要となる苗生産に挑む

さて、順調なユーカリ栽培でしたが、5年前に思わぬ事態となりました。それは、メリクロン苗の生産会社アグリ事業から撤退し、苗を入手できなくなったのです。このままでは、樹勢が衰えた木を植え替えることができず。そこで菅谷さんは、自分たちで苗を作ろうと決めました。「メリクロン苗の開発者や知り合いの力を借りて培養してもらい、私がそれを鉢に植えて養生し、会の仲間に分ける計画です。培養は非常に難しく、養生も一筋縄ではいかず、3年間はひたすら試行錯誤の連続でした。

ようやく今年から、1カ月に200〜300本のメリクロン苗ができるようになりました。ですが、まだすべての会員には行き渡っていません」

菅谷さんはユーカリ専用の苗温室を作り、メリクロン苗の生産拡大を目指して取り組んでいます。なぜそこまで頑張れるのか聞いてみました。

「シルバーウェーブの苗自体が優良固体で、市場評価も高いからだけでなく、愛着があるからです。一歩始めに導入した苗ですし、自分たちが作り上げたオリジナル品種で商標登録もしています。今後、メリクロン苗の生産が軌道に乗ったら、まず波崎地域をシルバーウェーブでいっぱいにしたいですね。その後、もし他の産地から求められたら苗の販売をしようと考えています」

それも実現したら、波崎で誕生したシルバーウェーブが日本各地に広がっていくかもしれません。

枝もの産地化を目指して

ユーカリ畑を見せてもらうと、シルバーウェーブと一緒にコニファー類のブルーアイスが風に揺れていました。ブルーアイスは銀色を帯びた葉がクリスマスリースにぴったりで、



シルバーウェーブ®

最近ではブライダルなどの需要も増えて通年出荷しているそうです。「ユーカリに限定せず、会員みんながそれぞれ苗を仕入れ、さまざまな枝ものを栽培するようになりまし。ここ数年はミモザの需要が増えていますね。それから、イタリアンルスカスは昨年6万本出荷し、今では波崎地域の生産量が日本一なんですよ」と話す菅谷さん。会員の皆さんが栽培している品目を尋ねると、千両・若松やユーカリのほか、コニファー類、アカシア類、ロシアンオリーブ、ピット、ガマズミ、菊、コバノズイナ、オリーブ、スノーボール、シルバーアニバーサリー、ノバラ、オタフクナンテン等々、数え切れないほど名前が上がりま。枝もの産地化」という大きな目標に向けて、これからも新しい品目が続々と増えていきそうです。ハサキ・グリーンファームズ研究会をはじめ、意欲的な生産者たちによって神栖市の農業の挑戦は続きます。



ブルグシュアカシア。栽培品目は拡大中